

立場を執つて居られた(大類伸博士、同著への序)以上、其立場に就て若干の問題、又此際特に重要性を有つと思考せらるゝ幾千の概念混亂(例へば第四篇第一章の劈頭、佛蘭西革命の意義に於て見らるゝ如き同革命への政治、社會、社會主義革命なる諸概念の誤れる把握と混用其他)等瑕瑾なしとはしない。然し仄聞するが如くんば、氏は其後既にオーラルを揚棄してマチエの見解を持せらるゝに至つてゐたと謂ふ。果して然らば此遺著又氏にとつて既に歴史的なるものであらう。筆者茲に於て愈々、自己批判飽迄峻嚴にして常に斯學の發展に獻身されし氏に衷心畏服絶大の敬意を表さざるを得ないと共に、斯かる瑕瑾決して同遺著の眞價を減する能はざるのみならず、否寧ろ却つて更に燦然たる光彩を放つものであらう事を確信するものである。敢て西洋近世史研究者のみならず一般讀者の必讀を切望する所以である。(改造社發行、定價三圓五拾錢)(西井克巳)

○ A. Shewan, Homeric Essays, 1935

シュリーマンに初まつた多くの考古學者の活躍とその

目醒しい成果とは、ギリシア古代史の研究に新たな方向と視野とを開いた。ギリシア青銅文明時代の唯一の而かも信すべき記録とされてきたホメロスの詩篇が、解剖され、分析され、再組織が試みられた。かゝるホメロスの取扱方は、即ち、この著者の謂ふところの destructive criticism は前世紀の末には隆盛を極め、遂にはその本家なる獨逸にあつてさへ反動が起るに至つたと、シェワンは序文で言つてゐる。正に、ホメロスの研究はかやうな經驗をへて來たのである。そしてラングに捧げたこの著者はこの「破壊的な批判」攻撃の亂射の内に立つて、飽く迄傳統のホメロスを防衛してきた勇士であり、この著書は敵の矢を防止し得たと信する盾の武功の数々でもあらう。かくてこの書は一九二一年から一九三一年に亘つて、著者が Classical Reviews, Classical Quarterly, Classical Weekly, Classical Journal, Classical Philology 其他の雜誌に發表した論文五十四篇から成り、七編に分類されてゐる。

再び序文に見るならば、最近五十年には破壊的な批判

主義の著書や論文は漸くに減じたが、尙ほ今世紀の初めに三つの異端 heresy が現れた。Dorfield の Leukas-Ithaka theory、Leaf によるイリアスの Catalogue 攻撃、Murray によるホメロス詩篇は長年月と多くの集成と削正とよりなるとの説明がそれであつた。そしてまた Walter によつて唱へられ初めた Scheria は fairyland なりとの説も亦、解し難いところであると。かくてこれ等の異端邪説の論駁文は全卷の三分ノ二略々三百頁否全卷を占めるといへよう。何分論文集であるがために、論旨の重複が多いのであるが、左にシェワンの説の概略を述べてみれば、イタカと題する第一編(十二論文)によれば、Dorfield 等の Leukadist が、オディッセウスの子テレマコスが求婚者達の伏兵を避けた Asteris 嶋をば Arkoudi の内なりとし従つてイタカはレウカスなりとするのは誤である。イリアスの「船の目録」が後世の作でない以上——この説明は第二編——そこではイタカは明かに Thak 嶋であり、また古傳承も常に然様に傳へてきた。Leukadist は「港」を初めとしてホメロスに記述されてゐる自然をばむしるこ

の嶋よりは Arkoudi に見出されるとの理由から、立論するがそれは三千年といふ長年月が自然に及ぼす變化を無視し、ホメロスを徹底的なリアリストとして解するものであり、また彼等がアルクディに發見した港も確乎たるものとはいへない。(1)(2)(10)(便宜上以下論文の題目の代りに本書における論文番號を用ゐる)、そしてテレマコスの航路をテキストから検討しても(3)、ネリコスの町の位置(12)、イタカに關する記述からも(11)レウカス説は不合理といはねばならない。レウカス説には反對であるが、Brewster は Leukas-Came 説をとなへてイタカ問題に一石を投じたのに對し、(4)(7)において反對する。その内イタカへの貿易は東方より行はれたとの説明は注目される。

第二編はリーフの著書 Homer and History を編名とする。この書は當時における合理主義的解釋による劃紀的なものであつただけに、シェワンは十一の論文を發表して、リーフの解釋を否認しつゝ付けてゐる。イリアスの「目録」は後世の作なること、ミケーネの富はその地の交

易によるのではなくして單に軍事政治上の中心たりしことに基づくこと、従つてその當時にコリントは存在しなかつたこと、アガメムノンの主權は全ギリシアに及べること、レウカス・イタカ説などが相容れるを許されざる點であつた(1)。リーフが目錄と他の部分の記述との不一致の例として擧げるイオルコス、フェライ、ブテイオティスなどの地方とベレウスとの關係(2)、アルゴス王ディオメデスやドゥリキオン王メゲス(11)の問題について、リーフの見解はテキストの誤讀或は粗讀の結果でありとして、更に Allen, *The Homeric Catalogue of Ships* の

抜粹を加へる(8)。かくてシェワンによれば目錄はイリアスと同一人の作なのである。次にトロイア遠征艦隊はリーフの否定にもかゝはらずアウリスに集合したし(3)(4)、アガメムノンの全ギリシア軍總指揮權は一時的のものであつて、ラングの言ふ loose feudalism はギリシアの状態であり(5)(7)、ミケーネ時代のコリントの存在と繁榮はテキストのみならず近時の Wace, *Blegen* 等の發掘によつても動かし難いところであつて、その邊

りは海上による東西貿易と陸路による南北貿易の十字街に當り、コリントはそれ等の交易を制御する地位にあつて、通貨税によつてその「黄金に富むミケーネ」となつたのである(6)(10)と。

*The Rise of Greek Epics* なる マーレイの著書名を掲げた第三編は、この German Homeric criticism の信奉者の新説の論破に向けられる。マーレイの書はその第二編においてイリアスは traditional book なりと斷じ、similes の繰返し、兄妹婚や敵に對する残忍の風習などの削正を擧げたのであつた。しかしシェワンの精細なテキストの研究によると、削正されざる蠻風は尙ほ諸所に見出されるし(1)、直喩の繰返しは詩人の常であり(2)、マーレイの如き見解は Homeric Pessimist のみがその理由を見出すにすぎないと。そして今更ながらマーレイの new plan は已に old plan に克服されてゐるとして、Unitarian Lang の功をたゞへてゐる(3)。

第四編 Scheria は著者が誇るところの考證であるが、難船したオディッセウスが打上けられたこの國に對する

fairlyland theory が依つて立つ諸事實をば、凡て詩人空想の産物にあらずして、現實世界の描寫なりとし(1)(2)、進んでそこに住むファイエケースの生活に非アカイア的な、しかしアカイアの信仰と神とを知る未開社會を見、古傳承が傳へる如くにスケリアはコルキラであり、ミケーネ時代のそれであると斷言してゐる(3)(4)(5)。第五編 The Language and Verse 第六編 The Repetition に納められた諸編は或はホメロス言語の同一不異を證し、或は同一表現の繰返しは必してホメロス詩篇が一人の作なることを動かすものにあらずと例證し、或は Wilamowitz, Bolling, Leaf 等の separatist な論著に反撃し、第七編 Miscellaneous も同一意見の主張の集成である。

以上全卷の概観は説きて足らざる點甚だ多い。しかしそこに我々はホメロス研究の、延いてはギリシア古代史の難問の重要な殆んど凡てに觸れてゐると思ふ。著者が序文において、この書出版の主なる動機としてホメロス研究者への寄與を擧げてゐることは、この故に充分に果されてゐるであらう。而かもシェワンの論文は一方の

代表的な解答であるから。その飽く迄もホメロスを事實の記録として信奉し、その論證においてもホメロスを離れてホメロスを證するにはあらずして、常にホメロスからホメロスを證する方法に我々は不満を感じて、考古學の側からの反證を要求するであらう。未だ我々は合理的な批判主義に對してテキストの自由自在の驅使にのみ據つて、凡ての攻撃を撃退し得たと信する著者に、一種訓誥學者的な熱と固執とさへも感ずるであらう。だが然し Leukadaist と Ithakist との對立、Separatist と Unitarian との論争は止まず、即ちシェワンの上述した見解は最後の判定を得てゐない。彼が種々の異端に對して幾年にも互つて反復し、反復しても駁論を發表せざるを得なかつたこと、それ自身が問題の困難さと重要さを明示してゐるであらう。そして最後の判定が下る日が来る迄は、否恐らくその日になつて我々は彼の最一つの著 The Lay of Dolon 1911 と共にこの著書に充分傾聴すべきであらう。(B. Blackwell, Oxford, pp. 456 邦價約十七圓八十五錢)(村田數之亮)